

産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN発行所 ©産業経済新聞大阪本社 2014
〒556-8660 大阪市浪速区湊町2-1-57
☎ 大阪(06)6633-1221(大代表)

産経新聞

角膜症に培養細胞移植

京都府立医大など

京都府立医大の木下茂教授や同志社大の小泉範子教授らのグループは12日、角膜が濁って視力が低下する「水疱性角膜症」の患者に、培養で増殖させた角膜内皮細胞を移植する世界初の臨床研究を始めたと発表した。角膜内皮細胞は人間の体内では増殖せず、これまで培養も難しいとされていた。すでに患者3人に手術を実施しており、視力が回復するなどの効果を確認しているという。

角膜内皮細胞移植のイメージ

・培養した内皮細胞

・角膜が濁った患者

・視力が回復



世界初、視力回復など確認

木下教授らは「ROCK阻害剤」と呼ばれる薬剤などを使って角膜内皮細胞を培養。安定して増殖させることに成功し、動物実験で安全性を確認した。

臨床研究は昨年12月にスタートし、米国のアイバンクから提供された角膜を使用。これまでに、50〜60歳代の男女3人に対し、細い針で約100万個の角膜内皮細胞を注入する手術を実施した。現在までの経過は良好で、移植前は0.05〜0.06だった矯正視力が、手術の1〜3カ月後には0.1〜0.9まで回復しているという。

水疱性角膜症は国内に約1万人の患者がいるが、これまでは角膜移植しか治療法がなく、ドナーは慢性的に不足している。今回の方法は内皮細胞を増やすことができるので、将来的には1人のドナーから約300人分の内皮細胞を得ることが可能になるといえる。

木下教授らは今後2年間で約30人の患者に移植手術を行い、平成28年度から製薬会社と連携して治験に入ることを目指す。